

翻
刻

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

気多
郡

- 一、私に句点、濁点を加える。原本のどこどこに濁点加えられているがそれらの区別は示さない。
- 一、漢字・仮名とも、原則として現在通行の字体に統一する。
- 一、文字の大小の比率、配置は原本と異なる。
- 一、改行は原本のままとする。
- 一、絵とその題を四角の枠内に掲げる。配列は原本に従う。絵に書き加えられている説明のうちの主なものも枠内に記す。

気多郡

【下二裏】

気多郡

同 水尻池 魚鱉数品。母来坂よりの風景最勝なり。漁舟

眼の下に村落林間まばらなる渺々たる沙漠。野水緑を争ふさま也。

荒波をきらふてこゝに澄む月の

清き心は水しりぬらむ

気多郡

同 母来坂 西辺の大阪なり。

母来坂ちゝ草めぐむ春くれば

みどり小まつの手を延^ハすらむ

同 酒津浦 亀宮 東ノ岬^ニ鎮座。社頭よりの風景絶妙なり。

往古東御館御遊の時浦人に綱引させ給ふ。霊亀を得て

奉る。吉兆なりとて祠を建て亀宮と崇祭れとおほせごと

ありし由。観音堂ハ村中西の山下小高き処なり。霊験

あらたにして村民信仰す。亀井殿時此村始樽谷と云を改号。

母来坂
水尻池



酒津
亀宮



杖突天神巖



【下二裏】

同 杖突阪 杖踵坂

是や此老のさか行力とも

なる杖つきの山の端の月

同 天神巖 奇岩の上に自然の天神の像あり。

誰^ガひいたうしほに乗てまたこゝに

北野の神の跡をたれけむ

同 舟磯阪 茶店より海上眺望比類なし。夏泊姉^{アネ}が茶屋

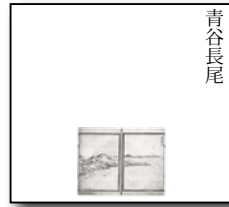
など総て同処。

心よき風の吹から姉^{アネ}の名の

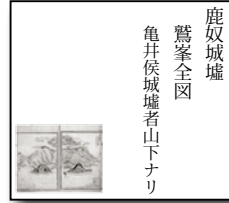
茶屋にや夏も泊り初けむ

同
青谷長尾

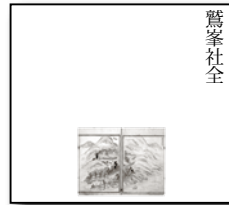
因幡海陸より遠望。この長尾を際り西ハ不見。
この鼻の岩間に芒を産す。富士の一もとに類す。
万世の亀の長尾の小薄は
よはひもともに延るとぞ見る



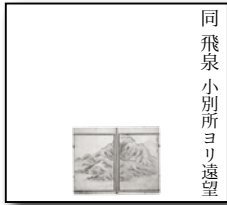
青谷長尾



鹿奴城墟
鷺峯全図
亀井侯城墟者山下ナリ



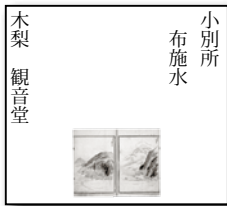
鷺峯社全



同 飛泉 小別所ヨリ遠望



梶宿社



小別所
布施水

木梨
観音堂



小林山讓伝寺

同
鹿奴里 気多郡

亀井侯在城の趾。山上妙見宮。社頭美麗なり。風景秀逸。
櫓台外堀今なを存す。町外の遠望無双。茶店の旅客を
見て

うれしげな顔の紅葉は肴にも
酒にも秋の小男鹿の里

同
幸盛寺 山中鹿之介幸盛墓并に位牌。幸盛寺殿潤林浄了大居

士と彫たり。天正 歳七月二日と誌。

同
鷺峯 鷺峯大明神ハ近県の大社なり。鷺峯山の

下同名村中にあり。○此嵩峯靈嶽にして嘗ニ雲霧不^{ツネニ}断
半腹より上ハ老杉鬱茂として天外に涌出^{ハシユツ}せり。○幽谷老杉
森々たる百仞^{セン}の岩壁より飛泉^{ミナダリ}漲落る。中々に近倚ことかた
し。此方に正覚石として林間にあり。仏経彫刻のあとまばらに見
ゆ。絶景の全体は小別所より眺望最勝なり。
旅人の上をも見ずにいそぐらむ

鷺が高峯の夕立のころ

雲に飛ぶ鳥もかゝなく鷺が峯の
たきの音にや草がくれせむ

鷺峯向ニ当ル

同 小別所谷口茗荷 是村中清水田の側に正月茗荷の僅
に萌生するを採て某に上るよし。毎年恒例と。

雪の中に萌る茗荷は腹に先ッ
いらぬうちから時を忘るゝ

同 八幡宮御手洗水 布施の清水 山下の浅池な

り。熱夏にも三度遊ぶ者なしと。其冷こと甚し。

夏ながらあつきにまけぬ真清水は

男山なる神のしるしか

同 小林山讓伝寺 閑静の地なり。

什物 亀井侯御遺物 陣団扇 馬角 蟹甲丈一尺余。川蟹ナリ。

八股の鹿の寺の宝には

またなき馬の角もあり覺

是蟹後谷池の中に栖こと幾千歳なりしにある知識の世に或夜枕
上に到り倚頼して菩提心を起し和尚に約して去る。明日人をし
て水中を視せしむ。はたして甲を得たると。今什物の一とす。大さ
鍋蓋のごとし。

横に行蟹も御法をあなかしこ

聞て仏の道に這ひこむ

同 木梨子村観音堂 靈驗新にて諸人尊信す。

諸人のしんかたからば木梨なる

大悲の光ありの身ならめ

同 梶宿大明神 近辺の大社なり。田圃の中に鎮座。

今朝見れば梶の宿りの神垣を

すゞしめ申す秋の初風

同 滑石阪

是阪路九曲にして小石を踏で登ること凡三十余町頂に到れば郊原
国堺の地蔵を越てゆくく見るに早蕨叢生して男女此方彼方
に採るさまいと春気色おもしろくおぼゆ。こゝに阪路の歩ミくるし
く汗かいたるもしばし忘却す。

きのぼりのする程くるしさるにても

迂りころげる滑石のみち

